

○吉松修治・渡邊英城  
（大分農林水産研花き）

【目的】 トルコギキョウの切り花栽培で、春出荷作型では開花促進のため冬期に重油を多量に必要とする。そこで、高昼温低夜温条件が開花期や切り花形質に与える影響を検討し、重油消費量を削減するための温度管理方法を明らかにする。

【材料および方法】 供試品種には‘ボレロホワイト’と‘あずまの碧波’の2品種を用いた。いずれも2008年9月29日に播種し、10月末まで20℃設定の冷房育苗を行い、12月2日に2.5号ポットへ定植した。定植後は、ポットを10cm間隔（10cmの9マスネット使用）×2列で配置し、2列おきに1列空け底面給水ベンチ上で開花まで管理した。ポットの用土にはピートモスを、施肥には被覆燐硝安加里 100 日タイプを1株当たり3g用いた。試験区の構成と加温温度は第1表に示す。また、加温は定植日から5月11日まで行った。

【結果および考察】 前報の試験では、対照区の加温設定温度を前昼温・後昼温25℃－夜温18℃とし昼温が天候に左右されにくい条件としたが、今回の試験では慣行区（対照区）を終日18℃とし、実際に行われている栽培条件に近づけて比較を行

った（第1図）。

平均採花日は、‘ボレロホワイト’では変温1区が慣行区より14日早く、変温2区は4日早かった。‘あずまの碧波’では変温1区が慣行区より7日早かったが、変温2区は慣行区と差がなかった。

切り花品質は、‘ボレロホワイト’では慣行区が最も優れていた。変温1区は慣行区に比べ、切花長、切花重、茎径が劣ったが、変温2区は慣行区に比べ、切花長は劣ったが、ほぼ同等の切り花品質だった。また、いずれの変温区も慣行区に比べて節数が少なかった。花器のボリュームを表す主茎頂花重は、慣行区が最も優れていたが有意差はなかった。

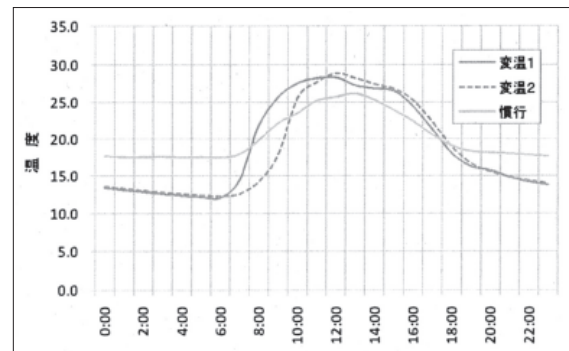
‘あずまの碧波’においても‘ボレロホワイト’とほぼ同様の結果であった（第2表）。

以上のことから、トルコギキョウの高昼温低夜温管理では、9:00～12:00は30℃、12:00～9:00は8℃とすると慣行と同等の採花期に同等の品質の切り花が得られることが判明した。また前報の試験の前昼温を7:00から30℃とした場合の対照区と同等となる結果より、加温時間を短縮できた。

第1表 各試験区の加温設定温度

試験区	前昼温	後昼温	夜温
変温1	30℃(7:00-12:00)	8℃(12:00-16:00)	8℃(16:00-7:00)
変温2	30℃(9:00-12:00)	8℃(12:00-16:00)	8℃(16:00-9:00)
慣行	18℃(7:00-12:00)	18℃(12:00-16:00)	18℃(16:00-7:00)

※変温1・2区は30℃、慣行区は25℃で天窓・側窓開放。



第1図 各試験区の平均温度（1～4月）

第2表 開花期と切花諸形質

品種	試験区	平均採花日	切花長 (cm)	切花重 (g)	節数	茎径 (mm)	分枝数	有効花蕾数	主茎頂花重 (g)
ボレロホワイト	変温1	5月7日 c	129.2 c	114.2 b	15.5 b	6.5 b	3.6 b	7.3	29.0
	変温2	5月17日 b	135.1 b	133.9 a	15.9 b	6.6 ab	4.1 a	7.3	30.0
	慣行	5月21日 a	143.3 a	136.1 a	19.6 a	6.9 a	4.0 ab	7.4	30.7
あずまの碧波	変温1	4月30日 b	102.3 b	95.9 b	13.6 b	6.4 b	2.8	8.9	—
	変温2	5月7日 a	101.6 b	104.3 a	13.9 b	6.6 ab	2.7	8.7	—
	慣行	5月7日 a	113.2 a	105.1 a	16.8 a	6.8 a	2.9	8.4	—

注) 同一品種内の縦異符号間に有意差あり (Tukey,  $p < 0.05$ )